

機関番号：22501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20592688

研究課題名（和文） 精神疾患をもつ訪問看護利用者とその家族への効果的な家族看護技術の検討

研究課題名（英文） Exploring the effective home visit nursing for clients with mental illnesses and their family care-givers.

研究代表者

片倉 直子（NAOKO KATAKURA）

千葉県立保健医療大学・健康科学部看護学科・准教授

研究者番号：60400818

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、訪問看護ステーションからみた、精神疾患をもつ利用者への家族支援の体験とその頻度を把握し、その支援の困難要因を明らかにすることである。

2009年12月8日から2010年1月9日まで、300の訪問看護ステーションに質問紙調査を行った。82訪問看護ステーション（有効回答率27.3%）と160人の看護師が回答した。質問紙は、家族支援における困難場面の遭遇の有無と、29項目の具体的な家族支援場面における体験を看護師にたずねた。具体的な看護支援場面における体験は因子分析を用いてカテゴリー化し、家族支援の困難感との関係はロジスティック回帰分析を行った。

60人（37.5%）の看護師が家族支援における困難の遭遇があると回答した。29の具体的な家族支援の体験は「Ⅰ.家族による支援体制の不十分さ」「Ⅱ.サービスに関する手続き上の問題」「Ⅲ.利用者への世話に関する家族の不適切な対応や認識」「Ⅳ.利用者よりも家族への訪問看護提供の比重の高さ」「Ⅴ.家族の精神状態の不安定さ」「Ⅵ.家族による安全性が確保されない利用者への介護方法の選択」「Ⅶ.利用者のサービス利用や財産面の権利に対する家族の侵害」「Ⅷ.訪問看護などの社会資源に対する家族の受入れの消極性」と8カテゴリーに分類した。看護師の家族支援における困難感とは各カテゴリーに関連したことから、家族支援における困難要因と考えられた。この領域における訪問看護サービスの促進のための課題を検討した。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to identify the difficult factors in home-visit nursing in caring for a family of a client with psychiatric illness. A survey was conducted from December 8th, 2009 until January 9th, 2010 by using questionnaires for a sample of 300 home-visit nursing offices. A total of 82 offices participated, giving a 27.3% response rate, and 160 nurses answered the questionnaires. The questionnaires asked whether the nurses encountered difficult experiences or not and 29 actual instances in caring for the client's family. Factor analysis was performed to be sorted by categories, and logistic regression analysis was performed to determine the difficult factors of the nurses in care for the family.

Sixty nurses (37.5%) answered to encountered difficult experiences. Twenty nine actual instances were included across 8 categories : 1) inadequate family support to the client, 2) inability for family to understand procedures related to social services, 3) misunderstanding by family recognition or a means of care-giving, 4) nurses spending too much time with family rather than providing the client, 5) instability of the family's mental condition, 6) family's incorrect choice as a means of care-giving, 7) family's interference in client's decision making rights, 8) family's refusal in allowing client's use of certain social services. Logistic regression analysis showed that the nurses' difficult experiences were associated with the 8 categories. The strategies of family nursing in the home-visit nursing services in psychiatric field were described with the relationships between the actual instances and the nurses' difficulties.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・家族看護学

キーワード：精神疾患，訪問看護ステーション，家族看護

1. 研究開始当初の背景

文献を調べてみると、調査されている家族は「介護者」としての位置づけであり、精神疾患と利用者に対する家族の理解の促進などである。インタビュー調査の回答を了解した家族を対象にした文献などもあった。しかしながら看護の支援が必要な同病の同居家族や、長い介護に疲弊した家族、または訪問看護の援助の受入れが消極的な家族などに対して、看護師が何をいどどのような困難を感じ、どう対処しているのかの報告はほとんど見当たらなかった。

2. 研究の目的

本研究は、訪問看護ステーションにおける精神疾患をもつ利用者への訪問看護の家族支援の実態を把握した。特に、家族員の生活困難を発見した場合の訪問看護の困難点や対処と、その際他職種連携やケースマネジメントの状況に注目した。

3. 研究の方法

質問紙作成に先立って、平成20年に精神疾患をもつ利用者へ訪問看護を提供している訪問看護ステーションの看護師4人に、家

族支援における困難事例を個別インタビューした。またこれら看護師から他機関との連携が家族支援における困難に関連しているという報告があったため、彼女らが普段連携をとっている精神保健福祉士2人と障害福祉担当保健師1人にも連携に関する内容を個別インタビューした。その結果にもとづき質問紙を作成した。

平成21年9月現在、全国の指定自立支援医療機関（精神通院医療）の届け出をしている訪問看護ステーション2288件のうち、無作為抽出した300件に所属する管理者と、認知症を除く精神疾患をもつ利用者に訪問看護を提供した経験のある看護師を対象とし、質問紙調査を行った。管理者に訪問看護ステーションの属性を、看護師に家族支援の実態と看護師自身の属性をたずねる質問紙調査を実施した。

質問紙は、平成21年12月中旬に配布し、平成22年1月末日まで回収した。

300件のうち、98件の訪問看護ステーションから返信があり（回収率32.6%）、160人の看護師が回答した。これらの調査票の結果を統計的に分析した。自由記載の回答は、内容の類似性にあわせて分類した。

4. 研究成果

調査票の有効回答は94件（有効回答率31.3%）で、そのうち精神疾患をもつ利用者に対する訪問看護を実施した経験のある訪問看護ステーション（以下、ステーション）は82件（87.2%）であった。この82件を分析した。これらステーションにおいて、精神疾患をもつ利用者の月間登録人数は、全体の

10%未満が64.4%と最も多く、ついで90%以上が12.2%と二極化をみとめた。また精神疾患をもつ利用者の月間登録人数と、精神訪問看護指示書による月利用者人数とに差を認めたことから、利用者の中には主疾患が別にあり、合併症として精神疾患をもつ者が含まれていることが考えられた。

調査票に回答した看護師は160人で、訪問看護師の平均経験年数は18.6±SD8.6年、精神科訪問看護が2.6±SD3.4年、精神科看護経験のある者が51人（31.9%）であった。

訪問看護における家族に関する困難の経験は60人（37.5%）が「ある」と回答した。また利用者以外の家族員が精神疾患を患っている、あるいは疑われるケースを経験した者は54人（33.8%）であった。家族への支援時の経験は、「利用者のケアよりも、家族の苦労を聞く時間が長くなることもある」（65.5%）、「家族が独特の価値基準を持って利用者の介護にあたっていることがある」（61.3%）等であった。またすべての家族への支援時の経験は、家族に関する困難の経験を増す要因になっていた。家族に行った看護の内容のうち、診療報酬で認められていないが、「家族と利用者を各々ケアできるように、2人体制で訪問することがある」と回答した看護師が18.7%認められた。

連携やケースマネジメントの経験は、「精神障害者をサポートする地域の行政組織などをよくわからないことがある」（61.6%）、「精神疾患を持つケースに対応できる他の福祉サービスが充分にないことがある」（59.4%）、「精神障害者の支援を熟知している専門家

がケースマネジメントに入っていると仕事がしやすいことがある」(58.9%)、「行政職員のケースマネジメント能力にバラツキがあることがある」(55.0%)、「ケースマネジメントの調整がなされない状況で訪問看護を依頼されることがある」(50.1%)等の順で認められた。

連携やケースマネジメントの経験の内容を統計的に5領域に分類した。これらの分類の各々は、家族への支援時の経験と関係があることから、家族に関する困難が生じた際に起こっていると考えられた。また精神疾患が主疾患か否かに関わらず、精神疾患をもつ利用者の増加につれて、困難の要因である家族への支援時の経験と連携・ケースマネジメントの経験が増加した。精神疾患が合併症の場合、契約前に行政や精神科専門病院と連携が形成されず、困難が生じたときに初めてステーションが連携やケースマネジメントの調整を始めている可能性が考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

① 片倉直子：訪問看護ステーションにおける精神疾患をもつ利用者の家族に対する支援内容の実際。第29回日本看護科学学会学術集会。(2009)。幕張メッセ(千葉県)

② 片倉直子、井上洋士、山本則子：精神疾患をもつ利用者とその家族を支援する訪問看護ステーションにおけるケースマネジメントの実態とその背景要因。第15回日本在宅ケア学会学術集会。(2011)。県立広島大学三

原キャンパス。

〔図書〕(計0件)
〔産業財産権〕
○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片倉 直子 (NAOKO KATAKURA)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授
研究者番号：60400818

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

山本 則子 (NORIKO YAMAMOTO-MITANI)
東京医科歯科大学・保健衛生学研究科・教授
研究者番号：90280924

井上 洋士 (YOJI INOUE)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：60375623